

(4) 小島・柳原遺跡群出土の塔鉢形合子蓋の模様

寺内 貴美子

1 はじめに

小島・柳原遺跡群は長野市柳原に位置する。一般国道18号（長野東バイパス）改築工事に伴い、2016～2019年度に長野県埋蔵文化財センターが発掘調査を行い、平安時代と中世以降を中心とした遺構遺物がみつかった。

類例も少なく、注目された銅合金製仏具である塔鉢形合子（以下本遺跡出土品という）は2020年3月に刊行した発掘調査報告書に調査成果を掲載した。本年度、保存処理を実施し、得られた成果を報告する。

2 塔鉢形合子とは

仏塔の相輪形鈕を持つ蓋と台脚付身で一組なる金属製合口造の容器である。舍利容器として使用された例もあるが、本遺跡出土品は、柄香炉と共に法会等で使用された供養具の香合（香の入れ物）と考えられる。国内では、法隆寺献納宝物、正倉院宝物、日光男体山山頂遺跡出土品が知られている。中国（唐時代）や朝鮮半島（統一新羅時代）でも出土例があり、大陸や半島との関係が強い金属製品である。

3 保存処理の実施

劣化をおさえるための保存処理を実施した。鉛や微量のヒ素を含む銅製品である本遺跡出土品の保存処理は、①処理前記録、②錆取り（メス・実体顕微鏡使用）、③有機溶剤洗浄、④ベンゾトリアゾール処理、⑤パラロイドB-72キシレン溶液による樹脂含侵（1回）、⑥coating、⑦処理後記録の工程で行った。

土砂を巻き込んだ錆を除去した結果、本来の器面がみえるようになり全体の形状が明確となった（図1）。なお、重量は、97.2g（処理前）から96.4g（処理後）と減少した。

4 新たな模様の確認

器面を覆っている錆を除去している過程で、蓋本体上部の沈線で仕切られた区画（図2）に、極細沈線で表現した模様と打刻点を確認した。図3の1から3にかけて残存しており、極細沈線で形を表し、線と線の間を打刻点で一部埋めている。磨滅で消えている範囲があるが、連続した意匠であること推定できる。

また、X線CT画像でしか確認できなかった竜



第1図 保存処理後の塔鉢形合子

舎上面の模様も、今回の鋳取りを行った結果、肉眼でも少し確認できるようになった（図6）。

5 形態と模様

形態と模様については、報告書に記載したが、一部修正して再掲する。

法量：高さ6.3cm（宝珠除く）、口径7.8cm、最大径8.2cm、竜舎直径1.6cm、相輪直径上段2.6cm、中段3.1cm、下段3.5cm、基壇上部直径3.9cm、重量96.4gを測る。蓋本体厚さは0.07～0.2cmで、1mmに満たない部分がある。

模様：竜舎上面、相輪3段各上面、基壇上面、蓋本体外面に施されている（図5）。

竜舎上面には、雲状曲線が極細沈線で3か所に刻まれる。その内側には極細の短い沈線が、外側は三角状の刻みが疎になされている（図5・6）。

相輪は3段とも、凹線による同心円が2本ほぼ同じ位置に確認できる。1本は外縁から1.5～2.0mm、もう1本は4.5～5.0mm、線幅は外側が0.2～0.5mm、内側が0.1～0.2mmである（図5・7）。

基壇上面にも凹線による同心円が2本、外縁から1.0mm、6.0mmの位置に確認できる（図5・7）。

蓋本体外面では、基壇直下と真ん中あたりに2本で1単位になる沈線、身との接合部分直上に沈線1本が確認できる（図5・8）。基壇直下と次の沈線で仕切られた区画には、連続した模様が施される（図3～5）。

成分：銅を主成分とした合金で、鉛・微量のヒ素を含むことが、蛍光X線分析の結果判明している。

6 日光男体山出土品との比較

日光男体山山頂遺跡では、塔鏡形合子13点のう

ち、蓋は7点出土している。日光男体山山頂遺跡の塔鏡形合子蓋には、本遺跡出土品と酷似するものがあることは、報告書で指摘し、比較検討をしている。今回、蓋本体上部区画部分で、新たに模様がみつかったのを受けて、改めて比較検討をする。比較するのは、蓋本体の上部区画部分に模様がある日光男体山山頂遺跡出土品（以下男体山出土品という）5点と本遺跡出土品である（図9）。

男体山出土品1・2・3・5では、唐草文が蹴り彫り¹⁾、唐草文の外側は魚々子地²⁾にしてい



第2図 塔鏡形合子 各部位の名称



第3図 新たにみつかった模様位置



第4図 新たにみつかった模様（拡大）

る。唐草文は蔓（茎）と葉が連続して表現される。蔓から分かれて伸びた葉の方向が、左向き（男体山2）と右向き（男体山1・3・5）と、2方向に展開するが、それ以外はよく似た特徴を持つ。

男体山4は魚々子鑿を連続打刻して唐草文風の模様を展開し、前述した4点とは技法、模様とも異なる様相を示す。

本遺跡出土品では、男体山で施されている葉の表現と同様の模様とやや太めの蔓が、極細沈線で表現されている。蔓から分かれて伸びた葉は、左向きである。途切れている部分はあるが、唐草文と考えられる。極細沈線は線彫りであると思われるが、磨滅しているため技法は確認できない。唐草文の外側は、三角状の打刻点³⁾が疎にみられる。これらのことから、蓋本体上部区画部分の模様は、男体山2と類似するといえる。

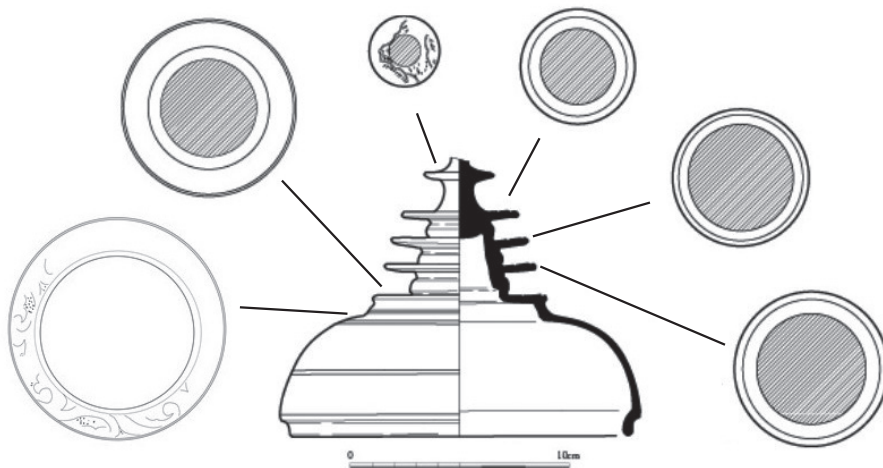
以上のことを考慮して、本遺跡出土品の蓋本体区

画部分の模様全体の推定を試みた。蔓から分かれた葉が区画の上部に接する箇所から次に葉が上部に接する箇所（図3▼部分）までを1単位とすると、確認できる1単位は区画円で90°前後の範囲に展開する。全周ならば、4単位程になると考えられ、男体山2よりゆったりとした印象を受ける唐草文の外側は、三角状の打刻点が疎に充填されると推定する（図10）。

7 おわりに

当初より、器形などから男体山山頂遺跡出土品との関係を指摘されていたが、今回新たに見つかった唐草文は、その見解をより強めるものといえよう。

最後に、地元をはじめ、研究者や調査に携わった多くの方々の関心を集めたこの出土品が、今後さまざまな意味で活用されること切に願うところである。



第5図 塔鉢形合子蓋の模様



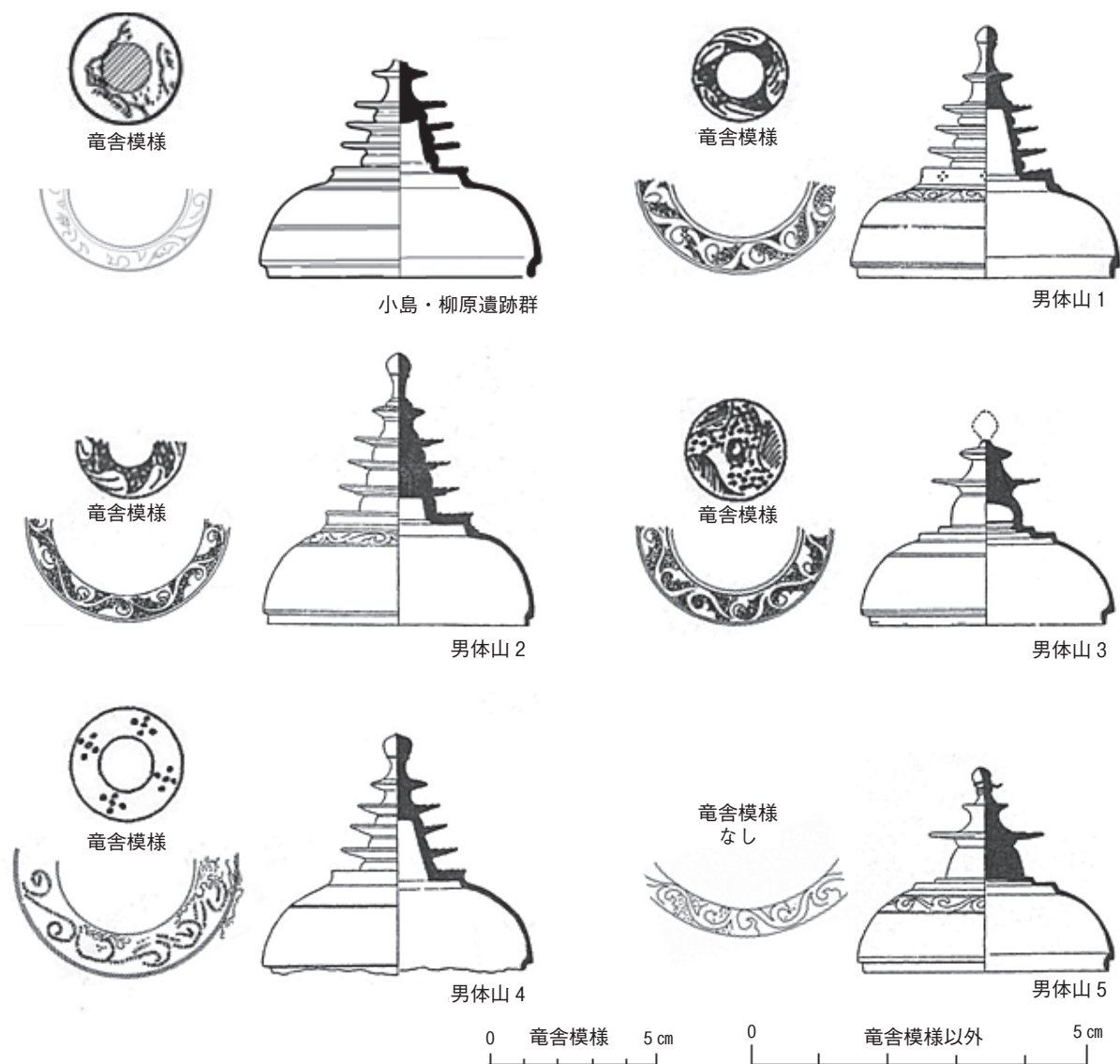
第6図 竜舎の模様



第7図 相輪・基壇上面 刻線



第8図 蓋本体刻線



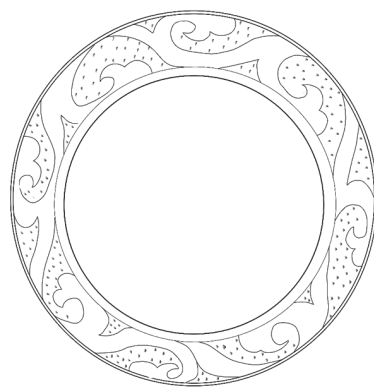
第9図 塔鉢形合子の模様

註

- 1) 金属製品に施す装飾技法「線彫り」の一つ。鑿を斜めに打って楔形の打痕を連続させて線状にする技法のこと。線彫りは他に「毛彫り」、「点線彫り」がある。
- 2) 金工の技法の一つ。先が小さな円形の魚々子鑿で、地の部分を魚の卵のような円文の埋めるように打つ技法のこと。
- 3) 三角状の打刻点は、魚々子鑿を斜めに打込んでできる打刻点であると奈良国立博物館内藤栄氏が指摘している(2020年12月12日実施『掘るしん in ながの—塔鉢形合子は何を語る—』内藤氏講演「塔鉢形合子がたどった道」)。
- 3) 日光男体山山頂遺跡出土品実測図は、報告書掲載図を加工している。ただし、男体山5の蓋本体上部区画内の模様は資料調査時の写真からおこしたスケッチである。

参考文献・図版出典

日光二荒山神社1963『日光男体山 山頂遺跡発掘調査報告



第10図 本遺跡出土品模様の推定復元

書』角川書店(名著出版 1991 再刊)

西川明彦2006『正倉院宝物の装飾技法』至文堂

長野県埋蔵文化財センター2020『小島・柳原遺跡群』

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書127